作品名をクリックすると作品に移動します。

【第三十五回「全国高校生読書体験記コンクール」中央入賞者一覧】

- 一、文部科学大臣賞
和歌山県 智辯学園和歌山高等学校二年 高尾果林
自分が「何者」か
(体験書籍『何者』朝井リョウ著)
- 二、全国高等学校長協会賞
香川県高松市立高松第一高等学校一年 高橋良輔
肉親の戦死と水島上等兵
(体験書籍『ビルマの豎琴』竹山道雄著)
- 三、全国高等学校長協会賞
鹿児島県立鶴丸高等学校二年 鶴田詩織
生きとし生ける椅子たちへ
(体験書籍『江戸川乱歩傑作選』より『人間椅子』江戸川乱歩著)
- 四、一ツ橋文芸教育振興会賞
埼玉県 星野高等学校二年 田中美実
歌で私は生きるだらう
(体験書籍『歌に私は泣くだらう 妻・河野裕子 闘病の十年』永田和宏著)
- 五、一ツ橋文芸教育振興会賞
石川県立金沢錦丘高等学校二年 若林哲哉
幕が、今、上がる
(体験書籍『幕が上がる』平田オリザ著)
- 六、一ツ橋文芸教育振興会賞
静岡県立掛川西高等学校二年 篠原麻梨子
親子
(体験書籍『月下の恋人』より『告白』浅田次郎著)
- 七、一ツ橋文芸教育振興会賞
兵庫県立長田高等学校一年 田渕里奈
自分と向き合う
(体験書籍『エイジ』重松清著)
- 八、一ツ橋文芸教育振興会賞
高知県 高知学芸高等学校二年 谷脇花乃
「物語」を探して
(体験書籍『凍りのくじら』辻村深月著)

第三十五回全国高校生読書体験記コンクール

【文部科学大臣賞】

自分が「何者」か

和歌山県 智辯学園和歌山高等学校 二年

高尾 果 林

近年、ネット社会というものが携帯電話やパソコンによって広がりがつがあるようだ。同時に歩きスマホやネット依存症など不穏な単語が社会問題として飛び交っている。私自身も外出時にはスマートフォンを手放せないたちなので、実のところ、これらの問題にはあまり目を向けないようにしてきたのである。

初めてスマートフォンを触ったのは中学二年生の時で、すぐに四文字の暗証番号を指が覚えた。指が勝手になぞっているように錯覚した時さえあった。出身地や年齢、趣味、さらには好きな歌手の名前まで陳列されたプロフィール欄。観光地をバックに笑顔を写した写真。誘導するかのような、文字の予測変換。この頃から私は、足元が覚束ないような、自分でもよく分からない微かな不安を感じていたようだった。

それを自覚したのは、朝井リョウの『何者』という本を読んだ時だ。この本の一番最初のページには、登場人物である六人のツイッター上でのプロフィールが、さながら実在するアカウ

ントのように示されている。私はそれらを、物語の単なる人物紹介のスペースだとはとても思えなかった。これには、『何者』に触れる前に読んだ土井隆義の『キャラ化する／される子どもたち―排除型社会における新たな人間像』という本も関係している。社会学者である土井さんの著書にあるように、インターネット上のアカウントとは本人が自分をキャラ化して作成した新しい人格だと言える。だから私は、六人分の「キャラ」の表示がその人間の紹介にはなりえないと感じたのだ。

「俺たちは、人知れず決意していくようになる。なんでもないようなことを気軽に発信できるようになったからこそ、ほんとうにたいせつなことは、その中にどんどん埋もれて、隠れていく。」

この文章を読み返す度、私は「なんでもないようなこと」とは何かを模索してしまう。「たわいのない話」という使い古された表現の意義を探ろうとする。というのも、最近、人と向き合う実際の会話で硬くなってしまうことが何度かあったからである。

隣の家で祖母と共に暮らす私の祖父は、数年前から認知症を患っている。最初は軽いもの忘れ程度だったのがあつという間に進出し、私達家族のことを忘れ、今ではまともな会話もできない時さえある。夕食のおかずのお裾分けによく祖父の家を訪ねるのだが、見た目だけは何も変わらない祖父にどう声をか

けたら良いのか分からないのだ。何かたわいのない話をとと思うのだが、私のことも勿論忘れてしまっている祖父を前に、どきまぎして口を噤んでしまう。

インターネットならそうはならない。自分の「キャラ」らしい言葉を使えば良いだけだ。相手への返信までの時間は無限にあり、詰まれば会話を断ち切っても良い。私が微かな不安を感じていたのはそういう点である。現実とネットとの間で不安定に揺れているかのような感覚。本物の自分とキャラ化した自分が緋い交ぜになり、自分が「何者」なのか分からなくなりつつある。ネットのように人格を上手く操ることは現実ではできないのに、キャラに基づいて会話をしようとしているのだ。

そう考えると、例えば教室での休憩時間中の友達との会話が「たわいのない話」になるわけがないと思うようになる。相手の表情を窺いながら自分の声で話すのだからその会話には意味がある。そこで漸く自分が「何者」なのか分かるのではないだろうか。ネット上では幾つもの「キャラ」を操ることができたとしても、実際他人と向き合って話すのは一つの人格を持った生身の自分だけなのである。電車で揺られながら液晶画面と向き合うのと、教室で友達と笑い話をするのでは、私にとって本当に別世界だ。話の種を蒔き大きく咲かせることは容易ではないが、それは現実の会話でしか養えない経験で、自分の人格を発見するきっかけにもなることを、私は『何者』から教わ

った。「自分探し」と言うのと拙い響きだが、それによって自分が他の何者でもないことを意識できるのだ。だから私は、人の会話を今までよりずっと大切にしていきたいと思った。

『何者』を読み終えて数日経ったある日の夕方、また祖父に会う機会があった。籠にいっぱい桃の実を眺めながら、以前は無かった気持ちがあるのにふと気付いた。まだ知らない自分の一面に出会えるのではと期待に胸を焦がす私が出たのだ。

体験書籍

『何者』朝井リョウ著

第三十五回全国高校生読書体験記コンクール

【全国高等学校長協会賞】

肉親の戦死と水島上等兵

香川県高松市立高松第一高等学校 一年

高橋 良輔

幼い頃から、曾祖母の家にはよく遊びに行った。和室に、白黒の若い男性の写真が飾られていて、家族みんなで「お写真のおっちゃん」と呼んでいた。彼は曾祖母の兄で、昭和十八年に戦死した人で、二十七歳という若さだったと聞いていた。

三年前の中学一年生のとき、僕は『ビルマの堅琴』を読んでいた。すると、それを知った曾祖母に、話しておきたいことがあると呼ばれた。

奥の座敷についていくと、曾祖母は天袋から、古ぼけた木箱を大事そうに下ろしてきた。その中に、戦死した兄の遺品があるという。何と、お写真のおっちゃんも、水島と同じようにビルマで戦った人だった。

昭和十八年という、まだ早い時期だったから、遺骨も遺品もちゃんとした形でかえってきたと、曾祖母は言った。

まず、うす汚れた旗が目に入った。赤い染みのついた国旗だった。次に古ぼけた万年筆、数十枚ものはがきがあり、古い新

聞や当時のお金などもあった。また、座敷に飾られていた、隊長からの弔文も見せてくれた。

今年の夏は、終戦七十年ということもあり、新聞やテレビで色々な企画がなされていた。

元特攻隊の人達へのインタビューや、戦争について描かれた映画の再放送などがあった。その中で特に興味を持ったのが、僕が持っている、半藤一利さん著の『日本のいちばん長い日』が映画化されるというニュースだった。

僕はこれらのニュースを聞き、ふと、三年前のことを思い出した。しかし、お写真のおっちゃんのことを話してくれた曾祖母は昨年の春に亡くなった。僕は、『ビルマの堅琴』を読みかえしたくなった。そして、祖母に頼み、あの遺品をもう一度出してもらった。

改めて見てみると、国旗には出征するとき書かれたであろう寄せ書きがあった。国旗についた赤い染みは、鉄砲で撃たれた彼の血痕に違いないと、今回は気付いた。肌身離さず持っていた国旗ごしに胸を撃たれ、故郷から遠く離れた異国のジャングルで亡くなった彼の無念は、いったいどれほどのものだったろうか。また、恋人以上に慕わしい兄を亡くした曾祖母の哀しさは、いったいどれほどのものだったろうか。

古い新聞はビルマで発行されたものだった。はがきには、手紙をほしいこと、自分は元気であるということだけが書かれて

いた。しかし、その中に、俳句をびっしりと書き連ねたのが一枚だけあった。『一茶一代記』を読んだとして、それにあった俳句を書き写したものだ。真ん中ほどに、「淋しさは得心しても窓の霜」。まだ若かった彼は、一茶の俳句を通して自分の気持ちを伝えたかったのかもしれない。

水島上等兵は、はじめから戦死者を弔うためにビルマに残ろうと思っていたわけではない。早く本隊に戻って、みんなと一緒に日本へ帰りたい。そう思っていた。それなのになぜ、ビルマに残ろうと決心したのだろうか。戦死して、帰りたくても帰れなかった人もいるのに。日本には、家族の帰りを信じ、身を削られる思いで待っていた人もいるのだから。

彼はムドンへと向かう途中、ある森で日本兵の死骸を見た。遠い異国の地で亡くなった同胞達のために弔い葬ったが、河で腐爛した死骸の山を見て、嫌悪感が先に立った。しかし、ムドンの町の墓地で「日本兵無名戦士の墓」を見て、異国人までもが我が国の兵の霊を慰めているのに、自分はこの河の死骸の山を見捨てたことを恥じた。そして、ビルマ全国に散らばった同胞達の魂を休ませる場所をつくるまでビルマから離れることはできないと決心した。

この場で、僕は理解に苦しんだ。三年前に読んだときは、単に「こんな勇氣ある決心をするなんて、水島はすごいなあ」としか思っていなかった。水島にも自分の帰りを信じて待って

いる人がいただろう。その人達より、ビルマで戦死した、名前も知らない同胞達のために自分を犠牲にすることについて、今は全肯定できなくなってしまった。曾祖母は恋人以上に慕わしい兄の帰りを、高祖母は何よりも大事な息子の帰りを、どれほどの思いで待っていたのだろうか。曾祖母の兄は、どれだけ故郷に帰りたかっただろうか。

もう曾祖母に戦争の話を書くことはできない。しかし、曾祖母の兄の遺品が当時の様子を物語ってくれる。

戦争についても、水島がした決心についても、今の僕はまだまだよく分からない。しかし、頭のすみに置いておいて、少しずつでも考え続けるようにしたい。そしていつか、自分の意見を持てるようになりたい。その時こそ、本当に『ビルマの豎琴』を、そして水島の心を理解できるだろう。

体験書籍

『ビルマの豎琴』竹山道雄著

第三十五回全国高校生読書体験記コンクール

【全国高等学校長協会賞】

生きとし生ける椅子たちへ

鹿児島県立鶴丸高等学校二年

鶴田 詩織

孤独だった。特に理由もなく、ふとした瞬間孤独は私を襲った。友人と話しているとき、通学途中の電車内、偶然目が合った鏡の中の自分……。それは不定期でどこまで続くのかすら分からないものだったが、いつも私の心を大きく揺さぶるのだった。私はたった一人。誰の心に留まることもなく、数秒後には顔すら忘れられているのではないだろうか。そういった不安のような、哀しみのような感情が湧き上がってはじわじわと私を侵食するのだ。周囲に合わせて無難に会話をし、笑う。高校入学を経てそんな生活も特別ではなくなった。それが尚更私を孤独にしていたのかもしれない。すっかり馴染んだセーラー服も、歩き慣れた通学路も、突然私を突き放した。途方もなく広い世界で、私はどこに在るのだろうか。答えのない疑問を投げかけ続ける回数は、日に日に多くなっていた。

そんなある日のことだった。「江戸川乱歩没後五十年」。偶然立ち寄った書店でそれを初めて知った。小学生のときは、少年

探偵団に胸を躍らせ、怪人二十面相に魅せられたものだった。そんな過去の読書体験から読み易そうな文庫本を手にとった。しかし、高校生の私を魅了したのは、狂気じみたグロテスクな世界観だった。何編かの物語のうち、ある一編に私は強く目を引かれた。『人間椅子』。このそう長くない一編の物語に、私の孤独はその見え方をがらりと変えたのだ。

奥様、という書き出しから始まる奇妙な一通の手紙。椅子職人を名乗る男は、その中で自らの罪悪を告白していく。醜い容貌のために甘美な妄想にふけっては味気ない現実に絶望し、彼はとうとう一つの恐ろしい考えに至るのだった。美しい椅子の中に潜み、どこまでも椅子とともに行く。とあるホテルの椅子として過ごした彼は、椅子に座る様々な女性に恋をしていった。暗闇に包まれながら、彼は不思議な感觸の世界に溺れるのだった……。

読後、私は結末に感嘆するとともに、ある種の安心が感じられた。ああ、私は椅子だったのだ、と。そう思わずにはいられなかった。私の中に誰かが潜み、息を殺して外をうかがっている。その容貌を他者に見られるのを嫌い、しかし深く腰掛けた者に思いを募らせる。一目でいい、「椅子」の中の私が一目でも貴方に会えたならば。恋慕のあまり「死んでもよい」と考えた椅子職人と同じだ。醜く、誰かに見つかり責められることを恐れ、「椅子」から出ることを拒んでいる、もう一人の私。狭

く苦しい暗闇の中で、じつと誰かが深く腰掛けるのを待つ毎日。どんなに孤独なことだろう。何を考え感じたとしても、それが伝わることはない。けれど、時にやってくる革ごしの感触に、密かに心を躍らせている。

そう考えるようになってから、私の孤独は興奮にも似た奇妙な高揚となった。人間、それは皆きつと生きる椅子そのものなのだ。椅子、椅子、椅子……。教室にも、電車にも、街中に椅子があふれている！誰もが真実の姿をさらけ出すのを恐れ、人間の形をした「椅子」に潜んでいるのだ。隠れる椅子はそれぞれ、隠れる理由もそれぞれ。しかしながら皆孤独を抱いている。そう考えると自分の孤独感はより小さくなり、取り巻く世界が一変した。

時として私を襲った孤独、それはきつと「もう一人」からの SOS だったのだろう。外に出て行きたい苦悩が私の心を震わせたのだ。社会には、苦しみのあまり残念なことだが自ら死を選択する者もいる。それもきつと同じなのだ。彼らの中の「もう一人」が、抑えきれず外側を破って出てきたのだ。その孤独や哀しみは、誰も本当に理解することはできない。その事実が一層彼らを苦しめる。最期に外を見た「もう一人」たちは何を感じたことだろう。幸福か、それとも絶望か。生きることから解き放たれた一瞬の安らぎ、或いはそんなものもあるのかも知れない。外から見ているだけの私たちには知りえないことだ

が。だからこそ、私は生涯をかけて多くの椅子に座っていきたいと思う。少しでも彼らの中身に近い感触を味わえるよう、深く、長く、じっくりと。それはきつと私の中身が望んでいることでもある。座り続けることで、私の中身と誰かの中身は極限まで密着できる。その結果、ありのままの姿の「もう一人」がひよっこりと暗闇から顔を出す日が来るかもしれないのだ。私も、「もう一人」も、その日の訪れをひたすら待っている。

世界は椅子だらけだ！椅子は語らい、ぶつかり合い、座った者の感触を恐る恐る確かめながら今日を生きている。私にもう孤独を恐れない。臆病な「もう一人」と共に、今日もまた椅子に腰掛ける。

体験書籍

『江戸川乱歩傑作選』より『人間椅子』江戸川乱歩著

第三十五回全国高校生読書体験記コンクール

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

歌で私は生きるだらう

埼玉県 星野高等学校 二年

田中 美実

人は誰でも、生きたいと願うものです。そして今の私は、それをとて強く感じて生活しています。

主人公である歌人の永田和宏ながたわひろの妻の河野裕子かのゆうこが、乳癌の宣告を受けるところから話は始まり、十年間の闘病生活が綴られています。

私は今現在、河野裕子が行っていたような闘病生活をしています。この闘病記にもあるように、河野裕子は病氣と闘いながら仕事に家事にと、普段の生活を大切にしながら過ごしていました。これは私の大切にしている部分と同じです。

私は入院を繰り返しながら、抗がん剤の治療を受けています。入院をし、五日間の投薬が終わると直ぐに退院をします。そして、早く元の世界に戻れるように気合いを入れます。自分が少しでも、社会や世の中の流れから外れたくないという気持ちからです。

河野裕子は「置いてきぼり感」という恐怖から精神的に苦し

み、夫の永田和宏に対して攻撃をし始めます。私はこれが当たり前のことだと思えます。自分がいなくても、世の中が進んでいくことを実感してしまうからです。それはすごく寂しく、自分という存在を否定されているように感じます。

私は一週間の入院ですら社会と離れるのが嫌で、家に帰りたいと、毎日願って生活しています。そしていつも寂しいと感じる時は、独りで過ごす時間です。

河野裕子は最期に近づくにつれ、食事を取ることができなかつたそうです。しかし彼女は独りで布団の中にいるのではなく、いつもの日常を大切にしていました。辛くても点滴棒を引きながら、家族との時間を過ごしたそうです。

私も退院の際には、何よりも家族との食事を楽しみにしています。これは河野裕子や私が特別に寂しがり屋なわけではなく、それほど人は強くできているのではなく、弱い存在ということを表しているのだと思います。

永田和宏と河野裕子は、夫婦お互いが歌人です。

この本の題名の『歌に私は泣くだらう』を見て、私は「歌」を合唱などの音楽だと思いました。私はクラブ活動で合唱をしているので、「歌」にとっても惹かれるものがあります。しかしこの場合の歌は、和歌などの「詠む歌」でした。和歌の深みや感情の表現の素晴らしさに、どんな「歌」でも人に考えさせ感動させることができるのだと、私はわかりました。

河野裕子は、最期まで歌を詠み続けます。その時の言葉に「五十年ほど歌を作ってきたけどほんとうに良かったと、この頃しみじみ思う。歌が無ければ、たぶんわたしは病気に負けてしまつて、呆然と日々を暮らすしかなかった。」とあります。私はこの言葉にすごく感動をし、同じ気持ちになりました。

河野裕子と私は、歌は歌でも違う「歌」ですが、感じることは同じなのだと思います。私は闘病生活の中で、入院中以外はほぼ毎日クラブ活動に取り組んでいます。歌を歌っている時は、病氣のことをあまり考えなくていいからです。でも何より重要なのは、仲間たちと一緒に歌を作り上げる一体感を味わうことです。それは歌うことに限らず、自分には仲間がいるという安心感を与えてくれます。そのおかげで、私は闘病生活を送ることができているのだと思っています。仲間や友人がいてくれるからこそ、自分は頑張ることができます。

この本は河野裕子が乳癌になり治療を受けた後、再発して亡くなるまでの話です。私は再発をするところまで、彼女と同じような状態です。

でも最後だけは、違うようになることを望んでいます。私は再発をしても、まだ闘える力を持っています。闘って闘って生きることを絶対諦めたくありません。これからも生き続けてこの世の中を楽しみ、自分のやりたいことや目標を達成していきたいです。世の中の人に、病氣や闘病生活をしている人や、そ

の家族の存在があることを、もっと知ってもらいたいです。生きることが、本当は難しく大変なことをわかってほしいのです。そして自分の人生を蔑ろにせず、生きる意味を考えて大切にしてほしいのです。事故や病氣以外で人が亡くならない社会が実現したら、幸せに近づくことができる、私は思っています。歌が今の私の生きる原動力になっています。河野裕子のように私も最期まで歌を歌って生きていきたいです。

仲間と一緒に歌を作り上げ、歌い続けて、今行っている闘病生活をいち早く終わりにして、私は元気になります。

体験書籍

『歌に私は泣くだらう 妻・河野裕子 闘病の十年』 永田和宏著

第三十五回全国高校生読書体験記コンクール

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

幕が、今、上がる

石川県立金沢錦丘高等学校二年

若林 哲哉

演劇部。それは、演劇の魅力に取り憑かれた高校生達が集まる部活だ。演劇というと、「ロミオとジュリエット」を思い浮かべる人も多いようだが、高校演劇でそんな脚本をわざわざ選んで上演するのはごく稀だろう。高校演劇は、名のごとく高校生のみで創り出す舞台だ。脚本作りから始めて、仲間達と共に丁々発止の議論をぶつけ合いながら、一つの舞台を創造するのだ。そんな高校演劇の県大会は年に一度きりだ。優秀賞を獲得すれば上位大会に行けるけれど、評価されなければそこで終わり。勝ち負けと関係ない多くの他の文化部に比べて、容赦のない世界だ。

今年七月、県大会本番二週間前頃だった。舞台監督である僕は焦っていた。というのも、劇の進捗が好ましくなかったからだ。翌日には出場校の舞台監督会議があるのに、僕達はまだ満足に通し稽古ができていなかった。僕達二年生はこれが最後の大会。なのに、目標とする最優秀賞には程遠い状況……。焦り

を通り越して苛立ちが募る。このまま部員全員がバラバラな気持ちで稽古を続けても無意味だ。舞台監督の僕の思いが、なぜ他の部員達に伝わらないんだ？ 気づけば会議用の資料を破り捨て、部室を飛び出していた。

やってしまった。別に上演したくないわけじゃない、むしろよりよい舞台を目指して上演したくてたまらないのに……。部員一人ひとりの声が科白のように脳裏に響いてきて、それから逃げるように自転車を漕いだ。

行き着いた先は図書館。その静寂の中に感情を押し込みたかった。怒りやら後悔やら訳の分からないまま本棚の間を歩いていると、一冊の本が目に入った。『幕が上がる』だ。

ある高校の演劇部。物語は地区大会で敗退するところから始まる。その悔しさを胸に、「来年は地区大会突破！」と再出発した演劇部に、新しい顧問が来て、演劇強豪校からの転校生が来て、紆余曲折を経ての全国大会出場。一見どこにでもありそうなストーリーだ。それでもその内容が僕にとって新鮮に響いてきたのは、高校演劇の真っ只中の深みにはまって、もがき苦しんでいたからだろう。当事者だからこそ、この本で客観視できたことが目新しかったのだ。「高校演劇あるある」的な箇所になんか共感することもあった。規模の小さな文化部というレッテルを貼られているせいで、満足な稽古場所が確保できない。あるある。他の芝居を見ながら、自分達の次の劇がした

くてウズウズしてくる。あるある。まさにその通りだ。

その中で僕が惹きつけられたのは、こんな一節だった。「とにかく楽しんでね。楽しくないと思つたら、それは演劇をしてないってことだよ。」作中の演劇部員達がある劇団の稽古を見学して、帰るときにかけられた何気ない言葉。でもそれは、僕の自省を促すのに十分な力を持っていた。そうだ。最優秀賞をとるといふ目標だけに執着していた。自分達の表現したいことを自分達のスタイルで共に楽しむこと。それが演劇の意味であり、本質なんだ。なぜ忘れていたんだろう。

本を手にして外に出た。携帯を開くと、演出担当からのメッセージ。案の定怒っていたけれど、最後に付け加えられていた「明日絶対来い。」の文字にホツとした。「ごめん。ありがとう。明日は絶対行く。」それだけ返信して帰路についた。早く帰って会議資料を書き直さないと。ペダルを漕ぐ足に、もう迷いはなかった。

それから二週間は、あつという間だった。楽しい時間はすぐに過ぎるといふけれど、本当にその通りだった。朝早くから夜遅くまで稽古し合い、間の取り方一つにも納得いくまで意見を出し合う。そんな日々も、あと本番を残すのみだ。

ベルが鳴った。右耳を包むインカムの感触が心地よい。幕の向こう側に聞こえないように、そっと喋る。「音響さん、準備いいですか。」「照明さん、準備いいですか。」「期待と緊張の高

まる中、合図を出す。

「幕、上がります。」

この時間を、思いっきり楽しもう。

そして、結果発表が読み上げられた中に、僕達の高校名はなかった。部員全員、涙が止まらなかったが、後悔はなかった。ただ一つ胸を張って言えるのは、仲間と一緒に思いっきり楽しんだ本番は最高だったということだ。『幕が上がる』の演劇部みたいに、全国大会出場とはいかなかったけれど、本番を楽しむということにおいては、作中の演劇部より勝っていた自信がある。

「私たちの前には、無限の星空が広がっている。私たちを乗せた銀河鉄道は、まだ走り出したばかりだ。」

『幕が上がる』の中で、一番の僕のお気に入りの一節だ。きつとこれから僕は、幾つもの劇に携わるだろう。そして、その度にこの夏の体験を思い出すはずだ。新たなスタートラインに立った僕の幕が、今、上がるのだ。

体験書籍

『幕が上がる』平田オリザ著

第三十五回全国高校生読書体験記コンクール

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

親子

静岡県立掛川西高等学校 二年

篠原 麻梨子

私は、父親の愛情を感じたことがない。もちろん、今、経済的に安定した生活がおくれるのは父のおかげだ。だが、「娘として愛されている」と感じたことはない。私の一挙一動を尽く否定し、自信を奪う。他人は安易に「不器用な愛情」などと言うが、それで済ますにはあまりにも度が過ぎている。

だから、この作品の主人公、梓が正直羨ましい。実の父と別れたとはいえ、不器用なりに愛を示してくれる、もう一人の父と出会えたのだから。しかし、梓は二人の父との狭間で葛藤し、育ての父を「あいつ」と呼ぶ。自分を置いて出て行った父ではなく、育ての父のことを。それは、顔も覚えていない父のことを、信じ続けたかったからではないだろうか。記憶がないからこそ、実父は自分を愛し、大切にしてくれた、そう信じたいはずだ。実父を信じたい、その気持ちの反動が育ての父への態度に表れたのではないだろうか。毎月の小遣いも、冷静に考えればおかしいとわかったはずだ。それでも信じていた。そう考え

ると、「血の繋がり」というものが、いかに強く、いかに恐ろしいものかということを感じる。私自身、父親の言動に過剰に反応している面がある。同じことを他人に言われても無視できるのに、相手が父親だとどうしても許せない。親だけは味方でいてほしい、その気持ちが強過ぎるのだろうか。他人からどう思われるかは、あまり気にならないのに、父親からの否定は何よりも怖い。幼い頃は否定されることが悲しかった。どれだけ頑張っても一言目は否定の言葉だった。今度こそ手放して喜んでくれる、と期待しては裏切られる、そのくり返しだった。きっと父は私のことが嫌いなのだと思った。ある程度成長すると、恐怖の感情は恨みや憎しみに変わった。自分自身を保つために、父との数少ない思い出を記憶の隅に追いやったのだ。優しい記憶に触れてしまえば、否定された時の苦しみが増してしまう。だから、梓のように記憶さえ残らない時期に別れてしまいたかったと何度も思った。大きな背中だけを覚えていられば、優しい父親を創り上げられる。その方が幸せだったのではないかと思っただけだ。結局、誰よりも父親を求めている自分の心に気が、悔しくなる。割り切れない感情こそが親子である証明なのかもしれない。

梓の「育ての父」は本当に不器用なペンキ屋だ。口数も少なく、感情表現が苦手な人物像が想像できる。梓はそこにいらついたのでないだろうか。自分の中で美化されていく父の記憶

と、それとかけ離れた育ての父の姿。実父の姿を育ての父に求めても仕方ないと頭では理解している。しかし、割り切れない感情が押し寄せてくる。育ての父を悪く言うのは筋違いだとわかっている、距離感がつかめない。「あいつ」という呼び方にはその感情が表れているのではないだろうか。一言で言い表せない、簡単には表現できない感情は誰かが抱えているものだ。

ここまで梓の立場ばかり考えてきたが、育ての父の想いはどうなのだろう。親友との別れ、そしてその親友の妻と再婚し、子の父となる心境はどのようなものなのだろう。そして、「娘」の心を守るために、親友の代わりに小遣いを振り込み続けた心情。「なあ、アツちゃん。俺を、アツちゃんのパパにしてくれねえか。」なんと不器用な言葉なのだろう。小学校入学前の幼い少女に向けられた言葉とは思えないほど不器用でストレートな言い方だ。状況を理解するにはあまりにも幼い少女と、理解させるための器用な言葉を持たない男。想像でしかないが、彼の親友、そして梓の実父は器用な人だったのではないだろうか。同じ野球部でもエースである実父と、ベンチにすら入れなかった育ての父。育ての父である彼は、不器用な自分に対するコンプレックスがあったのかもしれない。だからこそ、親友が娘と交わした「約束」が許せなかったのではないか。器用であるがゆえに娘の心を弄んでいるように感じた、だから自分が代わりに小遣いの約束を果たしていくと決めた。そのように感じた。

親友との別れは辛かったはずだ。それでも悲しみを心に秘め、愚直な父として生きてきた。それは、不器用なりの「強さ」ではないだろうか。目には見えない、伝わりにくいものだが、その「強さ」は無意識のうちに梓の支えとなっていたと思う。

私の父は、この物語に登場する二人の父のどちらにも似ていない。人の心を弄ぶほど器用でもなければ、不器用なりの「強さ」があるわけでもない。「良い父親」がどのようなものかわからないが、少なくとも私は父と良い関係を築くことができなかった。ひとつ感じたのは、「血の繋がり」と「過ごしてきた日々」は比べられるものではないということだ。それだけ親子の縁は深く、厄介なものなのだ。高校生、という多感な時期を過ぎれば、また何か変化が訪れるかもしれない。「親子」について考える良い機会となった作品だった。

体験書籍

『月下の恋人』より『告白』 浅田次郎著

第三十五回全国高校生読書体験記コンクール

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

自分と向き合おう

兵庫県立長田高等学校 一年

田 渕 里 奈

初めてこの本を手にとった中学二年生のとき、私には意味のわからない文があった。たった二文のもやもやした気持ちは、二年間ものあいだずっと心にあり続けた。十六歳となった今、やっと解明の鍵を自分自身で握ることができた気がする。

ニュース、映画や小説で、私は被害者の方ばかりに感情移入する癖があった。ツカちゃんと同じだ。それは、戦争に関して同じことだった。家族、家を失った人はどれだけ苦しかっただろう。罪のない人々が殺され、あまりに残酷だ、と。戦争は二度と繰り返されてはいけない悪いものだ。そんなことは、わかっている。しかし、悪いものだとは認識したのは自分で体験し、学んだからではない。ただ、イコールで結ばれた数式のように戦争＝悪いという他人に決められた定義が自分の中に浮かんでいただけだった。今まで私は、漠然と「戦争は悪いものだ。」と言っている自分が、正義を振りかざしているようでいやだった。

今年の夏、戦争の映画を見た。お国のために命を捧げると言い、殺されに行っているような兵隊たちがたくさん映っていた。覚悟を決め、敵と戦うその姿はかっこよかった。憧れを抱いてしまった。しかし、そんな自分が自身の中に存在することが、ショックだった。悲しみと残酷さが残るだけだった今までがあった分、自分で自分の感覚に驚いた。いや、本当は過去にも美化してしまう自分がいたのかもしれないが、素直に認められなかった。認めてしまうと、少しでも戦争を肯定することになるのだから。

しかし私は今、悪の存在を自分の中に認めた。私は、ただ善だけを持つ人間ではないのだ。そう思ったとき、心がすうっと軽くなるのを感じた。エイジも同じように感じたのだろうか。オバサンに通り魔にまちがえられた時、エイジは、自分を嫌いになってもかまわないから両親に、「少年」になった自分のことを信じてもらいたかった。「少年」にならない自分を信じているだけでなく、私も知ってほしい、家族や友だちに悪の部分を持つ自分を信じてもらいたい。正義を振りかざすだけの自分は、もうどこにもいないことを。

自分の中に、悪の存在を認めることは怖かった。しかし、悪を持たない人間なんてこの世に誰一人としていない、と私は思う。そして一度自分の中の悪を認めなければ、本当の善の意味を理解することができないのではないかと。善があるから悪

があり、悪があるからこそ善がある。寒いと感じたことがあるから暑いと感じることができるよう、悪を認めなければ善も認めることができない。自分のやっていることは全て善だとし、勘違いしてしまうのではないか、悪を自分で認められなかったから実際に犯罪を犯したり、何かやってしまっただけから初めて、自分の中の悪の存在に気づくのではないかと気づいた。

加害者に視点を合わせ、幻のナイフで次々と人を刺したエイジは、通り魔になったタカヤンにも自分にも「その気」があることを認めた。悪の存在を自分の中に認めたのだ。実際に通り魔になったタカヤンは、人を殴るまで自分の悪の存在に気づかなかった。海が急に深くなることを知らずにどんどん進んで行き、溺れてしまう子どもと同じだ。だが、大人はその深さの存在を教えてくれるが、悪の存在を教えてくれる人は誰もいない。自分で気づくしかないのだ。エイジは気づき、そして認めた。やっとなら、この二文の意味がわかる。「タカヤン、オレはもう、ここまでおまえと同じになった。だから、だいじょうぶ、オレはおまえじゃない。」

ふと考えた。ならば、悪を認められていなかった過去の自分はタカヤンと同じなのか。いや、絶対にそれは違う。私は私でしかなく、みんなとは絶対に違う。何かが違うはずだが何が違うのか、今の私にはまだわからない。その答えを、これからゆっくり探していこうと思う。子どもの出口だけれど、大人の入

り口でもある空間に今私はいる。何のために生きているのか、私には何ができるのか、いつまで夢を追いかけられるのか、と不安は尽きることなく私を襲ってくる。こんな時に、私はエイジという普通の少年に出会えて良かった。友だち関係に悩みもあるし、恋もする。何が特別なわけでもない、いち少年だからこそ、自分と正面から向き合う背中を押してもらえた。ありがとう、エイジ。

これからの人生、どうなるかなんて誰にもわからない。ただ、私は思う。「自分に正直に生きていきたい。」

体験書籍

『エイジ』重松 清著

第三十五回全国高校生読書体験記コンクール

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

「物語」を探して

高知県高知学芸高等学校二年

谷脇 花乃

当たり前のことだが、自分以外の誰にも物語があるのだ。

あの人は、何を感じているのかな。街行く人を見て、そんな風に想像することがある。友人と話して笑っている人、新聞を読みながら眉間に皺を寄せている人、下を向いて誰かを待っている様子の人。彼らにこの後、どんな出来事が、出会いが待っているのだろうか。

老舗の書店が新装開店したと聞き、家族で見物気分を訪れた。店内を廻り、自然と手に取ったのがこの本だった。周りにいた多くの人達がしているのと同じように。

この本の主人公、理帆子は、私と同じ歳の高校二年生である。彼女は自分の個性を Sukoshi・Fuzai (少し・不在) と名付けた。どんな場所や友達にも対応可能、しかし場の当事者になることは絶対になく、どこにいても、そこを自分の居場所だと思えないから、という自己分析。

理帆子は人や物事の性質に、「スコシ・ナントカ」を当て嵌め、

名付けることによって、人とは違った価値観を持ち、評価することを楽しんでいた。友人、恋人、家族でさえも常に冷静な目で見つめた。この奇妙な名付け方は、大変な読書家である理帆子が、読書体験の中から身につけた、物事を少し気楽に捉え得る処世術のようなものだった。理帆子の父親は漫画家、藤子・F・不二雄氏を敬愛しており、理帆子自身も影響を受けた。「ドラえもん」の生みの親として有名なこの漫画家が残した言葉に次のようなものがある。

『ぼくにとつての「SF」は、サイエンス・フィクションではなく、「少し不思議な物語」のSF(すこし・ふしぎ)なのです。』SFというジャンルへの書き手の姿勢、自作への解釈、そして読み手がSF全般に対して持つてよい観念として説かれた言葉であり、作品で練り広げられる論理を理解しようと無理をせず、知識として覚え込まなくてもよいという彼の考え方は、読む側の気持ちを楽しませる。理帆子は、藤子・F・不二雄氏の言葉から、目の前の現実を少し気楽に考える、「スコシ・ナントカ」を身につけたのだった。Sukoshi・Fuzai (少し・不在) は、理帆子の不安を少なからず楽にしたのだ。

「自己の不在」という不安は、私も持つことがある。自分以外の人から聞く話よりも、自身の身の周りで起きている話は、刺激が少なくつまらなく思えるのだ。そんな時に、本当に私は存在しているのかと、とても不安になる。刺激のある物語が、

もっと欲しいと感じて落ち着かないのだ。目に映る自分以外の人を見て、あれこれ想像するのは、誰かの物語を知り、そこから刺激を貰いたいからなのだ。では、私の物語は一体どこに存在しているのだろうか。

考えていくうちに、ふと思った。自分の個性を理帆子のやり方を真似て名付けるとすれば、なんだろう。私は理帆子とは違っている。私は比較的、相談できる仲間もいるし、一方どこでも対応可能なほどの器用さは無い。私自身の個性は Sukoshi・Fermata (少し・フェルマータ) だ。フェルマータとは、音符や休止符に付けて、その部分を任意の長さに延ばすことのできる、とても曖昧な、楽譜に使われる記号。中学校の音楽の授業で教わった。自分の意志で自由に、感性のままに生きている私に、それが個性だと考え、当て嵌めてみた。マイペースとも言えるし、悪く言えば、わがままでもある。家族や友人に待ってもらい、一緒のペースに付いて来てもらっている。つまりは、振り回しているのだ。しかし皆は、そんな私に愛想をつかさずともなく、ちゃんと私という存在を見てくれている。

ここで気付いた。自分もまた、誰かの中で存在していたのだ。私の物語もまた、誰かに読みとられる物語として、そこに存在するのだ。

読書体験とは、一冊の本を通して生まれる「物語」の連鎖ではないのか。書き手は主人公の物語を文字で綴り、その作業の

中で自らの内面の物語を掘り下げ、そして作品に投影する。しかしまた、作品の読み手も主人公の物語と同時に自己を見つめ、自分の物語を知ることになるのだ。

書店の店先で、この本と出会ったのも私自身の物語の一部であった。主人公の自己分析と一緒に体験するうちに、私はこれまで知らなかった自分の姿に出会い、存在を確認した。

街行く人を眺めていた私は、今日ここでやっと、自分の足元にも一筋の影が落ちていることに気が付いた。

体験書籍

『凍りのくじら』辻村深月著

選考委員による選評

切実さと経験

辻原 登

文部科学大臣賞の高尾果林さんの『自分が「何者」か』は、現在、高尾さんのような思春期の真っ只中にいる人たちにとって、最も切実な問題に、朝井リョウの『何者』をきっかけに切り込む。既に高尾さんの中に、高度な問題意識として胚胎していた、ネット社会で人と人が本当の対話をなくしてゆくのはなぜなのかという問いかけ。自らもまたそのような喪失感を抱え、「足元が覚束ないような」自分を、どうすればリアルな世界に置き直すことができるのか。この問いに、立ち向かい、真摯に答えようとした作品である。「たわいのない話」という使古された表現の意義を探って、彼女は、隣の家で祖母と暮らす認知症の祖父へ行きつく。祖父との対話。祖父の家にある「籠にいっぱいのお桃の実」のような実在感と鮮やかな換起力が全篇に充ちている。

高橋良輔君の『肉親の戦死と水島上等兵』は、亡くなった曾

祖母から見せられた、二十七歳の若さで戦死した彼女の兄の遺品について語り出される。「赤い染みのついた国旗」「古ぼけた万年筆」「数十枚のがき」「古い新聞」「当時のお金」「隊長からの弔文」。これらを丁寧に辿りながら、無念だった兵士の短い生涯をみごとに描き出した。特に葉書の一枚を紹介する条は秀逸である。兵士は戦地で『一茶一代記』を読んだとし、一茶の句を葉書にびっしり書き写していた。その中から高橋君は、「淋しさは得心しても窓の霜」を引き、「まだ若かった彼は、一茶の俳句を通して自分の気持ちを伝えたかったのかもしれない」とコメントする。戦争に関するどんな本より、いや高橋君が読んだ『ビルマの竖琴』より心に響く。

鶴田詩織さんの『生きとし生ける椅子たちへ』は、通学途中の電車内、偶然目が合った鏡の中の自分……を見て、「不安のような、哀しみのような感情」が湧き上がってくる、その感情に「孤独」と名付ける。孤独という使い古され、かつ抽象的な言葉に血が通った瞬間だ。江戸川乱歩の短篇『人間椅子』を読み解きながら、「孤独」と『人間椅子』がつながって、「私」はもう一人の「私」を発見し、「世界は椅子だらけだ！」と断言する鶴田さんの推理と想像力の働かせ方に感服。

田中美実さんの『歌で私は生きるだらう』は、切実という言葉が鋭く身に刺さり、深く心の奥へしみとおって、読み手の経験となる稀有な文章の例である。

河野裕子は最も秀れた現代歌人の一人だが、十年の闘病の末、癌で亡くなった。彼女の闘病を、夫で歌人で科学者の永田和宏が描いた『歌に私は泣くだらう』を、同じような闘病生活を送る田中さんは、「歌で私は生きるだらう」と変換して——歌は和歌ではなく合唱の歌だが——「仲間と一緒に歌を作り上げ、歌い続けて、今行っている闘病生活をいち早く終わりにして、私は元気になります」と結んでいる。

若林哲哉君の『幕が、今、上がる』は演劇部奮闘記。それが平田オリザの『幕が上がる』と絶妙にリンクして、小気味良いまとまり。

篠原麻梨子さんの『親子』は、「私は、父親の愛情を感じたことがない」とドキリとする文章が始まる。しかも、このドキリ感は、読み進めるうちに曖昧、うやむやに解消されることなく、最後まで読み手を引っ張ってゆく。内容は切実なのに、読後に爽快感があるのは、篠原さんの精神力と強靱な思考力から来る。田渕里奈さんの『自分と向き合う』は、世界は両義性にみちている、あるいは対立軸によって構成されている、そのことに気づき、己の中の悪と対峙することで、人生に対する認識を深めてゆく軌跡を、地道に辿った秀作。

谷脇花乃さんの『物語』を探して』は、今回の最終選考に残った作品中、最もしゃれて、チャーミングな作品だった。特に「読書体験」についての分析は見事だ。そして、末尾の一行

に感嘆。「街行く人を眺めていた私は、今日ここでやっと、自分の足元にも一筋の影が落ちていることに気が付いた」。

Sukoshi・Fermataに乾杯！

二つのスタンス

穂村 弘

『自分が「何者」か』は、新鮮なテーマを扱っていて注目した。生まれた時からインターネットがある世代にとって、生身の人格とネット上の「キャラ」の使い分けは、大きな問題なのだろう。そのような「私」が、「私のことも勿論忘れてしまっている祖父」とのコミュニケーションを通じて、新しい自分の在り方を探る姿に惹かれた。

『生きとし生ける椅子たちへ』は、タイトルからしてインパクトがある。読書体験記には、大きく分けて二つのスタンスがあると思う。一つは読書が現実の助けになるというもの。もう一つは読書が現実の見え方を変容させるといふもの。江戸川乱歩の『人間椅子』から「世界は椅子だらけだ！」という発想に至る本作は、後者のスリリングな魅力に充ちている。

『肉親の戦死と水島上等兵』には、再読という行為の不思議さが描かれている。初めて読んだ時よりも背景についての知識が増え、理解が進んだことよって、逆に「今の僕はまだよく分からない」と感じるようになる。その矛盾めいた事実に向き直ぐ向きあっているところが素晴らしい。

『物語』を探して』もまた、読書が現実の見え方を変容させるといふスタンスで書かれた秀作だ。「読書体験とは、一冊の本を通して生まれる『物語』の連鎖ではないのか」という認識のユニークさに加えて、「少し・フェルマータ」という言葉のセンスにも魅力を感じた。

『自分と向き合う』に展開されている考えの深さに感心した。作者は「悪の存在を教えてくれる人は誰もいない」と記している。生身の人からは教えられない悪というものを、本を読むことで掴み、それについて思考を丁寧巡らせているのだ。その結果、非常に重要な問題が浮かび上がった。

『親子』は「私は、父親の愛情を感じたことがない」という衝撃的な一文から始まる。「ここまで梓の立場ばかり考えてきたが、育ての父の想いはどうなのだろう」という他者への想像力と、自らの悩みから目を逸らすことなくしっかりと向き合う勇氣の両立に感銘を受けた。

『幕が、今、上がる』は、その内容だけでなく、文章のリズムがいい。「ベルが鳴った。右耳を包むインカムの感触が心地よい。幕の向こう側に聞こえないように、そつと喋る。『音響さん、準備いいですか。』『照明さん、準備いいですか。』期待と緊張の高まる中、合図を出す。『幕、上がります。』この時間を、思いつきり楽しもう。」など、音読するとその魅力が一層よくわかる。

『歌で私は生きるだらう』は「人は誰でも、生きたいと願うものです。そして今の私は、それをとても強く感じて生活しています」と始まる。読書体験記としては珍しい「ですます」調の文体に、読者を引き込む独特の力がある。「私」の気持ちがいりびりと伝わってくるのだ。

今を切り取る

角田 光代

キャラクターを作り、あたかもそれを演じるかのように振舞う「キャラ化」という言葉は、私が学生だったころは存在しなかった。高尾果林さんの『自分が「何者」か』を読んで、私たちが持ち得なかった悩みを、今の若い人は持たされているのだなと実感した。そのことの息苦しき、窮屈さが文章から読み取れる。SNSでキャラクターを演じる若者たちを描いた小説を読んだことで、作者は何者でもない自分に気づく。認知症を患った、まさに「何者」でもないかのような祖父との対話をふりかえる。「今」を切り取りつつ、普遍的なことを描いた体験記である。

鶴田詩織さんの『生きとし生ける椅子たちへ』は、もっとも印象深い一作だった。江戸川乱歩の小説をもとに、人間の孤独について考察している。私たちは椅子であり、椅子のなかに隠れた何者かであり、椅子に座る何者かである、という複雑な構造は、私には少々わかりづらかったけれど、そのぶん、だれとも共有できない私たち個人の孤独が際立って描かれているように思う。

本を読んでわからなかったことがわかった、もしくは、二年前に読んだときはわからなかったことがわかった——と、「わかった」体験記が多いなか、高橋良輔さんは『肉親の戦死と水島上等兵』で、「分からない」と明記した。何かを知ることが、わかることもある一方で、わからないことが増えることだと私も思う。わからないことを考え続けることで、私たちは「知る」に近づけるのだろうか。そうする意志を感じる、誠実な体験記である。

若林哲哉さんの『幕が、今、上がる』は体験記そのものがドラマ仕立てになっていて、読ませる文章だった。文章全体に合いが入っていて、読んでいる私も背筋が伸びる思いだった。何かに夢中になった学生時代は財産だとあらためて思った。

小説に描かれた悪を、自分のなかにもさがす、田渕里奈さんの『自分と向き合う』には、思考の跡がくつきりと見える。何かを得た、学んだ、というのではなく、悪について、本と取り組み合うようにして考えた、というのがいいと思った。

合唱が好きで、『歌に私は泣くだらう』を手に取った田中美実さんの『歌で私は生きるだらう』は、生きるという意志がまっすぐに描かれていて、強い。強い歌声が聞こえてきそうだった。その強さに引きこまれて読み、同じ強さで応援したくなる。『月下の恋人』の『告白』を読んだ篠原麻梨子さんは、『親子』を書くのにずいぶん勇気が要ったのではないかと思う。父親と

の確執を、きちんと距離をおいて冷静に描いている。小説のなかの親子と照らし合わせて、自分たちの関係を考える体験記の、そのまっすぐさにまず驚いて、それからこのまっすぐさに敬服した。作者が書くように、関係はこの先変わっていくだろう。だからこそ、今考えたこと、読んだ小説を書き記したほうがいいのだと思わせてくれる体験記だった。

「読書体験とは、一冊の本を通して生まれる「物語」の連鎖ではないのか。」という、谷脇花乃さんの書いた一文に、はっきりした。『「物語」を探して』の一文である。この体験記には、そんなふうなうつくしく、読み手を納得させる文章がちりばめられている。作者のなかにも「物語」があるように、この体験記のなかにも、いくつもの「物語」があると私は感じた。

自己への新たな気づき、そして勇氣

文部科学省初等中等教育局主任視学官

清原 洋一

今年の最終審査に残った十六作品、いずれも、読書を通して熟考するとともに、自分自身の行動や心の様について真剣に振り返り、自己に対する新たな気づきが生じている。しかも、それらを素直に上手に表現していて、心に響くすばらしい作品ばかりでした。

文部科学大臣賞に輝いた高尾果林さんの作品は、ネット社会の問題の一面をとらえ切り込んだ作品である。ネット上の「キヤラ」、人と向き合う実際の会話、その違いを自分自身の経験やそこで感じたことを交えながら対比し、問題点を鋭くとらえている。ネット上では、そのキャラらしく振舞い、詰まれば会話を打ち切ることも自由にできる。一方、実際の会話は、たわいのない会話であっても、相手の表情を窺いながら自分の声で話す。実際の会話には難しさもあるが、そのことの意味について深く考え、自分の人格を発見するきっかけにもなることを、心地よく受け止め表現している。

全国高等学校校長協会賞に輝いた二人も迫力のある作品である。

高橋良輔さんの作品は、曾祖母の兄の戦死、そのことと『ビルマの堅琴』の水島上等兵とを対比させながら綴っている。三年前にその本を読んでいるときに曾祖母から声をかけられ、曾祖母の兄がビルマで戦死したことを知らされ遺品を目にする。時を経て読み返すとともに遺品を再び目にしたとき、その間に感じ方は大きく変化していた。この作品の結びに、「いつか、自分の意見を持てるようになりたい。その時こそ、本当に『ビルマの堅琴』を、そして水島の心を理解できるだろう」とあるように、時を経て本を読み返すことでその変化を実感し、決意とも言うべき心情が伝わってくる。

また、鶴田詩織さんの作品も、実に思慮深いものがある。時が経るにつれ、本の感じ方も変化するものである。「江戸川乱歩没後五十年」を書店で知り、小学生の時に熱中した江戸川乱歩の文庫本を再び読むことになる。そして、高校生になって魅せられたのは、当時熱中した怪人二十面相ではなく『人間椅子』だった。それを読み深く考えることで、孤独の見え方ががらりと変わる。時折現れる様々な「もう一人」の自分、その出会いを楽しみにさえしている。それほどに本には力があり、その感動が伝わってくる。

一ツ橋文芸教育振興会賞に輝いた五作品も、心に自然に響いてきました。短い言葉ですが、私を感じたことについて示したいと思います。

田中美実さん、本の主人公に共感しつつ、仲間と一緒に歌を作り上げ、歌い続け、元気になる。その心情が、文章に素直に表現されています。

若林哲哉さん、演劇部の舞台監督としての経験、行き詰った中での一冊の本『幕が上がる』との出会い、演劇部の活動をやりきった充実感、そして、新たなスタートへ、その状況及び心情が見事に表現されています。

篠原麻梨子さん、親子について深く考え、それだけでなく、大きな心の変化を予感している。その気持ち、ひしひしと伝わってきます。

田渕里奈さん、「自分に正直に生きていきたい」この言葉が引き立つ文章の構成、実に読み応えがあります。

谷脇花乃さん、物語の主人公の自己分析と一緒に体験するうちに、これまで知らなかった自分の姿に出会うという、読書体験の醍醐味が伝わってきます。

このように、いずれの作品も読書体験をもとに、自己への新たな気づきがあり、それだけではなく他の人へも勇気を与える迫力を感じました。今後も読書を通して考え、心を磨き、未来を切り拓いていくことを願い、エールを送ります。

本と出会う。そして、人と

全国高等学校長協会

大池 公紀

読書には、目には見えない心の成長をさせてくれる媚薬がある。今回の作品にも各々の人がそれぞれの成長の跡を見せてくれた。今回は、成長をキーワードにして作品を覗いてみよう。

『自分が「何者」か』。今の時代だからこそ書ける作品。時代は過激に進んで行く。三年前のツールは少し古くなり、一〇年前のそれは古式ゆかしき物になってしまふ、そんな時代だ。肉体は一つであろうとも、現実の中で幾つかの人格・キャラを持つ人もいる。いわんやネットの世界をや。様々なキャラの混沌の中で自分が何者であるかが分からなくなる恐怖が、上手く伝わっている。高尾さん、お祖父さんにどのような声をかけましようか。きつとお祖父さんから見た高尾さんは、一つの像しか見えない。その一つこそ、高尾さんの真の姿かもしれない。

『肉親の戦死と水島上等兵』。戦の語り部がいなくなり、今は映像で見るか書籍を手取るかの方法しか残っていない。直接語られることがなくなった今だからこそ、この作品は重かった。書き手は、三年前に「お写真のおっちゃん」と出会ってから確

実に成長を遂げた。それは「(上等兵の行為を)全肯定できなくなってしまう」の言葉によって分かる。一茶の俳句に満ちたハガキにおっちゃん 생각이溢れている。水島はチャンスがあるのになぜ戻らないかと、かつて分かっていたはずのものが、今分からなくなる。これがきつと成長なのだろう。

『生きとし生ける椅子たちへ』。「孤独だった。」から始まる一三行の文章に、僕は引き込まれていく。この作品には不思議な世界があった。読み進めていくうちに僕の頭の中にも椅子・椅子・椅子が充滿し、身動きが取れなくなってしまう。「私は椅子だった」「出ることを拒んでいる、もう一人の私」、キーフレーズが怪しい。僕は、更に自分を求めて混乱し、出口を見失う。成長していなければ、人は自分の在り方を求めない。自分が何者だったのかの問いを抱けることこそ、成長の証だ。迷宮に紛れ込む、そんな妖しくも素敵な世界だった。

『歌で私は生きるだらう』。生きようとする人の文章、自分の生と対峙する強さを知っている人の作品に僕たちは時に励まされる。歌を歌うことは、大きな壁に立ち向かう人の勇氣と生への渴望を支えてくれる。田中さんが、元氣になりますと宣言した、そのことの実現を心から祈っています。

『幕が、今、上がる』。上手い！と唸った。ゲキ部で高校生活を送る、その楽しさがピンピンと伝わってくる。やはり芝居は一緒に創り上げて行くもの、一人ではできない。若林くんには、

いつかもつと大きな舞台が待っている。それは芝居ではないかもしれないが、その可能性を感じる文章だった。

『親子』。僕は、初めの一文からほとんど動揺しながら文章を読み進んだ。実父の記憶がないからこそ、そのイメージの中に生きている親子関係。でも、この作品を読んで今のお父さんが、どのようなことを感じてくれるのだろうか。きつと何か考えがあつてのことのような気がする。人は成長し変わる。篠原さんには、いつか父上のなぜに気づく時が来ることを祈りたい。

『自分と向き合う』。身の内の悪の存在に気づくことからかつて分からなかった謎が、再度の読書によって解明される。未来への旅は、「今の私にはまだわからない」から始めよう。考え続けることに成長がある。考え続ける自分が、確かにそこに存在している。そして、田瀬さんも成長し続ける。

『物語』を探して』。人にはそれぞれの物語がある。藤子氏のSF(すこし・ふしぎ)な世界から始まって、谷脇さんもSF(少し・フェルマータ)。自分が誰かの中で物語として存在していたことに気づく。そう、皆さんは自らの物語を紡ぎだす作家でもある。だから周囲の人たちにあなたの物語を読んでもらおう。これは読書の行為と同じっぽいよね。

* 第三十五回全国高校生読書体験記コンクール全入賞者一覧*

【文部科学大臣賞】

一編

和歌山県 私立 智辯学園和歌山高等学校

二年 高尾果林

自分が「何者」か

【全国高等学校長協会賞】

二編

香川県 市立 高松市立高松第一高等学校

一年 高橋良輔

肉親の戦死と水島上等兵

鹿児島県 県立 鶴丸高等学校

二年 鶴田詩織

生きとし生ける椅子たちへ

【一ツ橋文芸教育振興会賞】

五編

埼玉県 私立 星野高等学校

二年 田中美実

歌で私は生きるだらう

石川県 県立 金沢錦丘高等学校

二年 若林哲哉

幕が、今、上がる

静岡県 県立 掛川西高等学校

二年 篠原麻梨子

親子

兵庫県 県立 長田高等学校

一年 田渕里奈

自分と向き合う

高知県 私立 高知学芸高等学校

二年 谷脇花乃

「物語」を探して

【優良賞】

三九編

北海道 道立 札幌南高等学校

二年 大島菜瑚

本との「奇しき縁」

青森県 私立 松風塾高等学校

三年 大館由季

「美丘」と出会って

岩手県 県立 盛岡第三高等学校

二年 佐藤薫乃

『イギリス海岸』を読んで

宮城県 県立 白石高等学校

二年 村上海夕

十二番目の天使

秋田県 県立 十和田高等学校

二年 成田生絵

感謝の心で

山形県 県立 新庄北高等学校

一年 松本夏歩

変わる

福島県 私立 郡山女子大学附属高等学校

三年 阿部絢巳

その先の幸福

茨城県 県立 水戸第一高等学校

一年 原口真緒

言葉と向き合っていくために

栃木県 国立 小山工業高等専門学校

一年 井上奈津実

五年後の自分の一考察

群馬県 県立 前橋女子高等学校

三年 東野優里香

新世界へ

千葉県 国立 筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部

二年 渡邊千春

勇気という謎めいた存在

東京都	都立	東京都立志村学園	三年	鈴木花菜	刺激と変化
神奈川県	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	入倉芽以	青春
新潟県	私立	第一学院高等学校 新潟キャンパス	二年	多田未夢羽	何よりも大切なこと
富山県	県立	砺波高等学校	二年	小谷朱音	走
福井県	県立	藤島高等学校	一年	前田さつき	幸せ
山梨県	県立	甲府南高等学校	一年	櫻井大雅	「理想の世界」とは
長野県	私立	松本第一高等学校	二年	若林 洸	負けないために
岐阜県	県立	大垣南高等学校	二年	服部恭佳	罪の無い動物の消えゆく命
愛知県	県立	豊橋東高等学校	一年	中山淳子	『きみの友たち』を読んで
三重県	県立	名張西高等学校	二年	松山清美	私も勉強が出来ない
滋賀県	私立	近江兄弟社高等学校	三年	廣田珠々奈	師匠
京都府	私立	立命館高等学校	三年	池沢 樹	私にとつての陸上競技
大阪府	府立	生野高等学校	一年	生駒美月	脱皮
奈良県	県立	橿原高等学校	二年	高島明李	私の「心星」
鳥取県	県立	鳥取西高等学校	一年	花田沙和	あきらめない心
島根県	県立	松江北高等学校	二年	松原圭佑	真実と嘘
岡山県	県立	岡山朝日高等学校	二年	鴨井志歩	満天の星空
広島県	市立	広島市立沼田高等学校	一年	山口 蓮	地球とフーアとともに生きる
山口県	県立	岩国工業高等学校	二年	岩見 翼	転機
徳島県	私立	徳島文理高等学校	二年	花川 鈴	『かもめのジョナサン』を読んだ二年前の私と今の私
愛媛県	県立	八幡浜高等学校	三年	元山莉里菜	未来という駅へ
福岡県	県立	筑紫丘高等学校	一年	濱野 陸	本は人を変える
佐賀県	私立	弘学館高等学校	二年	今石 琴	「女、赤ひげ」を直指して
長崎県	私立	純心女子高等学校	一年	加藤みひろ	文庫本が教えてくれたこと
熊本県	私立	九州学院高等学校	二年	竹内新乃	命に向き合う
大分県	県立	大分豊府高等学校	二年	丹野千春	生きることは輝くこと
宮崎県	県立	宮崎大宮高等学校	二年	中條有喜	「茶色の朝」をむかえないために
沖縄県	県立	開邦高等学校	三年	官 尋	まだ若いからこそ

北海道	道立	旭川東高等学校	二年	松尾涼太	希望を「ひとへ」
北海道	道立	小樽桜陽高等学校	二年	坂本愛香	繋ぐ命と真実
北海道	道立	札幌月寒高等学校	一年	江畑咲良	循環
北海道	道立	札幌月寒高等学校	一年	山形沙羅	理想のふくを求めて
青森県	県立	青森東高等学校	二年	小畑結羽	道の途中
青森県	県立	八戸高等学校	三年	小林洋紀	死と我が生を見つめ。
青森県	県立	八戸高等学校	三年	高山咲希	『夜のピクニック』と私
青森県	県立	八戸高等学校	三年	中野朗吾	見えない安心の空間の広がり
岩手県	私立	岩手女子高等学校	三年	下河原瑠夏	人生の始まりと終わりに「おめでとー」を
岩手県	県立	大船渡高等学校	二年	古川葉奈	自分で決める「死」
岩手県	県立	盛岡工業高等学校	三年	民部田 蓮	人は変わることができる
岩手県	県立	盛岡商業高等学校	三年	中村優芽	いまの友情
宮城県	県立	仙台二華高等学校	二年	佐藤怜美	私が動物を好きになった理由
宮城県	県立	仙台二華高等学校	二年	永窪なつ希	「リストアート」〜新たな自分へ〜
宮城県	県立	仙台二華高等学校	二年	町屋綾佳	高二の夏は、
宮城県	県立	仙台南高等学校	二年	小原菜々子	新書から学んだ弓道
秋田県	県立	秋田西高等学校	一年	鷹島由季	想いは届く
秋田県	私立	聖霊女子短期大学付属高等学校	三年	丹後谷風香	ツナガリタイ
秋田県	私立	聖霊女子短期大学付属高等学校	二年	近江音々	世代を超えて繋がっていくもの
秋田県	私立	聖霊女子短期大学付属高等学校	二年	三浦真悠子	人が変える戦争の歴史
山形県	県立	新庄南高等学校	二年	八鍬杏子	感情の共有をする
山形県	県立	長井高等学校	二年	菅野 凜	『兎の眼』を読んで
山形県	市立	山形市立商業高等学校	一年	伊藤佑夏	次世代へ繋ぐ
山形県	県立	山形西高等学校	一年	木川いずみ	自分の答えを見つげるために
福島県	県立	会津高等学校	二年	星 のぞみ	戦争を実感するということ
福島県	県立	安積黎明高等学校	一年	大塚朱莉	十五の夏、私の決意
福島県	県立	安積黎明高等学校	一年	深谷茉莉子	知識と知恵

福島県	私立	聖光学院高等学校	三年	佐藤穂佳	私の剣道
茨城県	県立	鹿島高等学校	一年	角屋愛香	強くなる
茨城県	県立	水戸第一高等学校	二年	木下優香	私の進む道
茨城県	県立	水戸第一高等学校	一年	渡部夏海	本当の自分
茨城県	私立	茗溪学園高等学校	二年	有田沙英	失う世界、得る世界
栃木県	県立	宇都宮女子高等学校	二年	石居侑子	自分らしく生きるために
栃木県	国立	小山工業高等専門学校	一年	遠山尚子	「食」で繋ぐ、過去・現在・未来の私
栃木県	県立	栃木女子高等学校	二年	関口ひらり	ハッピーエンドな人生を
栃木県	県立	真岡女子高等学校	一年	齊藤恵子	「あと少し」向き合うこと
群馬県	私立	共愛学園高等学校	二年	田中咲良	「自分らしさ」という武器
群馬県	県立	渋川女子高等学校	二年	高尾千尋	強さ
群馬県	県立	高崎女子高等学校	二年	小林純子	天平の人生と現代の人生
群馬県	県立	前橋女子高等学校	二年	高橋 葵	虹色
埼玉県	県立	埼玉県立特別支援学校大宮ろう学園	一年	鈴木絵里奈	読書が性格に変化をもたらす
埼玉県	県立	坂戸西高等学校	二年	佐藤怜奈	『アンネの日記』を読んで
埼玉県	私立	星野高等学校	二年	江原麻耶香	たいせつなこと
埼玉県	私立	星野高等学校	二年	小磯ゆきな	難しくってたいせつなこと
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	三年	飯野 蒼	生きるための活力
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	三年	千田あかり	七十年目の警鐘
千葉県	国立	筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部	二年	小林美彩	成長して見えてくるもの
千葉県	私立	和洋国府台女子高等学校	二年	高木真宇	託された未来へ
東京都	私立	学習院女子高等科	一年	桑原夏子	和歌の入口
東京都	私立	共栄学園高等学校	三年	奥山翔太郎	未来を生きぬくために
東京都	私立	光塩女子学院高等科	一年	雑部窓意	大切な存在
東京都	私立	東京農業大学第一高等学校	一年	曾我江美利	自我と決断
神奈川県	私立	カリタス女子高等学校	一年	川崎花蓮	雨にぬれても
神奈川県	私立	聖セシリア女子高等学校	二年	綿貫遙花	生きる幸せ
神奈川県	県立	平塚中等教育学校	五年	篠田紗穂	これからの道
神奈川県	県立	平塚中等教育学校	四年	和田幸恵	消えてゆく住民

新潟県	県立	高田北城高等学校	一年	猪俣天心	旅の優しさ
新潟県	県立	高田北城高等学校	一年	小林大輝	自分と向き合う
新潟県	県立	新潟高等学校	一年	石井 南	人生から私を得た強さ
新潟県	県立	新潟高等学校	一年	山田哲也	答えのない学問
富山県	県立	高岡南高等学校	二年	島田 幸	強くあれ
富山県	県立	砺波高等学校	一年	中村 相	正しい生き方
富山県	県立	富山商業高等学校	一年	土肥千詠美	ひめゆりを知る、ひめゆりに向き合う
富山県	県立	滑川高等学校	一年	石坂安佳理	選択が私を変える
石川県	県立	金沢泉丘高等学校	二年	吉田伊織	誰もが抱える秘密
石川県	県立	金沢桜丘高等学校	一年	石岡未紗	黒ひげ危機一髪
石川県	県立	金沢二水高等学校	一年	山下日向香	いつかきつと
石川県	県立	七尾高等学校	二年	蒔田青空	二つの顔を持つ男
福井県	県立	高志高等学校	二年	中村仁美	心で勝負『かまえ！ぼくたち剣士会』を読んで
福井県	県立	藤島高等学校	二年	鳥居実里	『夜のピクニック』を読んで
福井県	県立	三国高等学校	一年	森 亜由美	私と千紘の「再生」
福井県	県立	若狭高等学校	二年	秋山史泉	私の生き方
山梨県	県立	甲府南高等学校	二年	一瀬優輝	『原爆と戦った特攻兵』を読んで
山梨県	私立	つくば開成高等学校	三年	山崎悠河	強く生きる
山梨県	県立	都留高等学校	二年	薬科あみ	指揮棒の向こうへ
山梨県	県立	都留高等学校	一年	吉川杏由	真摯に、ひたむきに。
長野県	県立	岩村田高等学校	一年	篠原大成	本当の自分
長野県	県立	大町高等学校	二年	長瀬葉月	マララさんから学んだ大切なこと
長野県	私立	松本第一高等学校	二年	横坂光希	他人のまなざしで自分を見る
長野県	県立	南安曇農業高等学校	二年	石原悠斗	僕を持つ「輝き」とは
岐阜県	県立	大垣南高等学校	一年	渡邊衣利佳	勇気を出して
岐阜県	県立	岐阜北高等学校	二年	西川 塁	鮮やかな世界
岐阜県	県立	岐阜北高等学校	一年	大原奈那子	考えの変化
岐阜県	県立	岐阜北高等学校	一年	安田有伽	生と死を考えて
静岡県	県立	掛川西高等学校	一年	松下ひかり	青春とマンボウ

静岡県	県立	榛原高等学校	二年	夏目明日香	旅をする私
静岡県	県立	浜松湖南高等学校	二年	大石桃子	私と『風が強く吹いている』
静岡県	県立	浜松湖南高等学校	一年	鈴木柚衣	世界で一番別れ惜しく、勇敢なさよならを。
愛知県	県立	一宮高等学校	二年	堀田萌音	恋をするということ
愛知県	県立	一宮高等学校	二年	村上 歩	ひかり
愛知県	県立	時習館高等学校	一年	松井慶一郎	深遠な魅力を感じて
愛知県	県立	豊田西高等学校	一年	久保田あかり	幸福な食卓と家族の力
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	三年	西村菜摘	本ととも生きる
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	一年	大島元希	「戦う」ために必要なこと
三重県	国立	鈴鹿工業高等専門学校	一年	駒谷しえな	あきらめない+努力=実現
三重県	私立	セントヨゼフ女子学園高等学校	一年	田中うらら	大きな夢、それはみんなの幸せに
滋賀県	私立	近江兄弟社高等学校	三年	田中陽菜	『萩原朔太郎詩集』を読んで
滋賀県	県立	高島高等学校	二年	山内若菜	名人になるまで
滋賀県	県立	東大津高等学校	二年	里見桃子	零と出会って
滋賀県	県立	東大津高等学校	二年	角野弘一郎	私の「今」と「未来」
京都府	私立	京都女子高等学校	一年	山田真央	私の生き方
京都府	府立	嵯峨野高等学校	二年	照田詩乃	「破壊」と「建設」
京都府	私立	立命館高等学校	三年	江口遼哉	繋がりと挑戦
京都府	私立	立命館高等学校	三年	仮屋美里	幸せの瞬間
大阪府	市立	大阪市立南高等学校	一年	上田芽依	このカラフルな世界で
大阪府	府立	河南高等学校	二年	田中友美	考えること
大阪府	私立	好文学園女子高等学校	二年	吉田磨論愛	絶望名人への道
大阪府	府立	天王寺高等学校	二年	奥野巴琉音	永遠はなくとも
兵庫県	県立	出石高等学校	一年	西垣美月	願いの物語
兵庫県	県立	加古川東高等学校	二年	金城 信	激情と人
兵庫県	県立	姫路西高等学校	一年	八木彰香	本当の自分であること
兵庫県	県立	姫路東高等学校	一年	石川優奈	教育は世界を変える
奈良県	県立	畝傍高等学校	二年	米田椎奈	言葉を編むと見えるもの
奈良県	県立	橿原高等学校	二年	藤木里咲	出会いの向こうへ

奈良県	県立	高田高等学校	二年	河野咲織	野球ノートと私の成長
奈良県	県立	高田高等学校	二年	小林広佳	命をかけて
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	二年	高橋優太	僕の深夜特急
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	土井美裕子	宇宙の暗闇に立ち向かう
和歌山県	私立	智辯学園和歌山高等学校	一年	山本有香	走ることに楽しさを考えて
和歌山県	私立	和歌山信愛高等学校	一年	御前友実	合唱再発見紀
鳥取県	県立	鳥取湖陵高等学校	二年	濱田みはる	一步の勇氣から
鳥取県	県立	鳥取東高等学校	二年	山口遼也	「残念な指導者」にならないために
鳥取県	県立	米子西高等学校	二年	野澤笙子	自分の言葉で自分を変える
鳥取県	県立	米子東高等学校	一年	遠藤はるか	「ガンバろう」の看護を目指して
鳥根県	県立	出雲高等学校	三年	池田有梨奈	自分是自己、他者は他者——「つるかめ助産院」を読んで
鳥根県	県立	情報科学高等学校	二年	安藤 遥	慰めなどなかった
鳥根県	県立	松江南高等学校	二年	原 亜海	命にごちそうさま。
鳥根県	県立	横田高等学校	二年	小川知可	他人のために生きること
岡山県	県立	倉敷天城高等学校	二年	奥原 唯	自分の色
岡山県	県立	倉敷青陵高等学校	一年	石井香帆	見守られて
岡山県	県立	玉野光南高等学校	二年	三宅亜樹	乗り越えた先に見えたもの
岡山県	県立	玉野光南高等学校	一年	加門奈菜子	言葉
広島県	私立	尾道高等学校	二年	里本奈緒子	背骨にしまったきりぎりす
広島県	県立	広島高等学校	一年	井上つぐみ	被爆者の訴えは、私達の訴えだ。
広島県	市立	広島市立沼田高等学校	一年	山崎友稀	絵に対する姿勢
広島県	国立	広島大学附属高等学校	二年	梶江亜未	未来へつなぐ
山口県	県立	熊毛南高等学校	一年	中澤里佳	私の未来の救世主
山口県	県立	徳山高等学校	二年	西中有紗	生きるという事を考える
山口県	私立	野田学園高等学校	一年	伊藤 航	自分が誇れる職業に就く
山口県	県立	豊北高等学校	一年	月岡美咲	『学年ビリのギャルが1年で偏差値を40上げて慶應大学に現役合格した話』から考えさせられたこと。
徳島県	県立	徳島北高等学校	一年	工藤瑞生	怒る
徳島県	県立	富岡西高等学校	二年	岡田茉莉子	私と志音の重なった青春

徳島県	県立	脇町高等学校	二年	久保朋美	犯罪被害者の心の回復
徳島県	県立	脇町高等学校	二年	西 朱理	教育で広がる世界
香川県	県立	坂出高等学校	二年	青木陽香	生きること
香川県	県立	高松商業高等学校	三年	石原凜子	吹奏楽コンクール
香川県	県立	高松商業高等学校	三年	金光里々花	「生きる」と「死ぬ」
香川県	市立	高松市立高松第一高等学校	一年	木原穂香	私の「世界を平和にするためのささやかな提案」
愛媛県	県立	大洲高等学校	二年	西岡亜海	私のリレキシヨ
愛媛県	県立	松山東高等学校	二年	福田 凜	見つめるということ
愛媛県	県立	松山南高等学校	一年	西尾美月	車輪の「上」にあるもの
愛媛県	県立	弓削高等学校	二年	浪切奈々	輝く未来に向かって
高知県	私立	高知学芸高等学校	二年	太田愛乃	「人間」を生きるということ
高知県	県立	高知農業高等学校	三年	井上優都	食べものとしての動物たち
高知県	県立	高知農業高等学校	三年	杉野有理	生きた文化財／伝統野菜がなくなると
高知県	私立	土佐女子高等学校	二年	三谷真依子	私は曾祖父を知りました
福岡県	県立	修猷館高等学校	一年	中村 陽	「あきらのマーチ」に支えられ
福岡県	私立	東海大学付属第五高等学校	三年	木村日奈	本当の蒼い空
福岡県	県立	門司学園高等学校	一年	鶴井あかね	感情と生きる
福岡県	県立	門司大翔館高等学校	一年	岡野 舞	想像することのすばらしさ
佐賀県	県立	唐津東高等学校	二年	谷口裕美	短所を武器に
佐賀県	私立	弘学館高等学校	一年	眞崎由梨佳	海を探す
佐賀県	私立	佐賀学園高等学校	一年	溝上佳奈	剣の道と将来の道
佐賀県	県立	致遠館高等学校	一年	南里昌哉	古賀穀堂のメッセージ
長崎県	県立	佐世保西高等学校	一年	大谷優奈	経験の与える意味
長崎県	県立	島原高等学校	二年	福田千尋	命とつながる看護師をめざして
長崎県	市立	長崎市立長崎商業高等学校	二年	並内祐希	誰かのために
長崎県	県立	長崎南高等学校	一年	堀内美咲	夢までの過程
熊本県	県立	鹿本高等学校	一年	中村友香	たった一人の父親
熊本県	私立	九州学院高等学校	二年	元田万琳	はじめの一步
熊本県	私立	九州学院高等学校	二年	山村七海	走り続ける

熊本県	私立	熊本信愛女学院高等学校	一年	立花千夏	過去を輝かせるために
大分県	県立	大分上野丘高等学校	三年	岡田梨緒	いつかゆるし合うために
大分県	県立	大分鶴崎高等学校	三年	小山田風沙	言葉の味わい
大分県	県立	杵築高等学校	三年	照山佳歩	記憶と幸せ
大分県	私立	昭和学习園高等学校	三年	秋好淳平	私の背中
宮崎県	県立	高千穂高等学校	二年	橋本佐智子	いのちの花
宮崎県	私立	宮崎学園高等学校	二年	橋爪杏佳	集団として
宮崎県	県立	宮崎西高等学校	二年	兒玉絃風	障害者を取りまく世界
宮崎県	県立	宮崎南高等学校	一年	矢野久瑠美	少女は卒業しない
鹿児島県	私立	鹿児島第一高等学校	一年	井上壘輝凱	強く生きる
鹿児島県	県立	加治木高等学校	二年	北園梨乃	時空を超えた一冊
鹿児島県	県立	武岡台高等学校	一年	池田隼都	青春の質量
鹿児島県	県立	鶴丸高等学校	三年	外山侑穂	見つけた「私」
沖縄県	県立	沖縄工業高等学校	二年	桑江朗百利	鉄のしぶきに憧れて
沖縄県	県立	開邦高等学校	二年	金城実希	走るのは好きですか。
沖縄県	県立	首里東高等学校	三年	池宮城朱里	今を大切に
沖縄県	県立	那覇高等学校	二年	伊集くりあ	私の幸せの定義

(敬称略)

上位中央入賞者八名の読書体験記、及び優良賞・入選作のお名前、
 高等学校名は、左記の「ツ橋文芸教育振興会の読書推進活動」ホ
 ムページに紹介されます(2月上旬予定)。
<http://www.hitotsubashi-bks.jp/dokusho/>